

# ニューミュージアム—出会いと発見・交流と発信の基地として

2011年10月8日～12月25日 埼玉県立近代美術館



埼玉県立近代美術館の常設展示室に設けられたコーナー、その床に渦を巻く色とりどりの写真や風車、壁面には躍動するダンスパフォーマンスと活動ダイジェストの映像。2008年からこれまで県内各地で展開してきたSMFの記録です。事業の概要を載せたガイドリーフレットやイベントチラシも配布し、今年度もともにぎやかにアートプログラムを実施した秋から冬にかけての情報発信拠点となりました。加えて、日ごろ美術館のフェイスとして活躍するボランティアスタッフの活動記録もあり、人びとが集い、参加し、交流するための基地をミッションとする美術館の実績が公開されました。

軽やかにまわる風車に合わせて記憶のネジを巻き戻せば、さまざまな出会いの場面が浮かんできます。写真の中では必ず笑顔と笑顔の間には、時間と労力を惜しまずに積み重ねてきた対話や、年齢も社会的立場も超えて築いた信頼関係がありました。美術の価値を伝える視覚メディアと、それ以外のジャンルや目的も含む多様な出来事とが交差して、ミュージアムが価値を再創造する場へと役割を広げつつあ

るのが実感されます。

さて、コーナーの一角には「あなたにとってミュージアムとは？」という来場者への問いかけが掲げられました。300件近く寄せられた回答のカードは、アートを通して未知なる世界、あるいは自分自身の内側に何かを「発見する」場所という意見や感想が多数を占めています。表現されたものを受け取るにどこまでも、視点や心を動かして、自分なりの意味を見いだそうとする、それもミュージアムと利用者をつなぐ活動の成果でしょうか。「明日に無力を感じても、遠い未来に希望を見る所」「ほんやりとしたものにフレームを与えてくれる」などのユニークな回答も。一方、「つまらない、資源と金の無駄」といったきびしい意見もありましたが、ほとんどが好意的。カラフルな文字やイラスト



トで彩られ、どれも小さなメッセージに込められた気持ちの大きさの伝わるものでした。

会期中盤には、カードの一部を羽ばたく蝶のイメージで展示しました。ミュージアムを取り巻く社会情勢とともにSMFの今後も未知数ですが、未来に持続可能な芸術活動基盤づくりを、多くの方がたとの協働で進めていきたいと思ひます。 小野寺茜(SMF事務局)

# 大宮アート散歩&アート・マップ制作

2011年10月23日 大宮(さいたま市)

SMFでは、これまで2008年に「浦和」、2009年には「川越」をスポットとして「アート散歩」と「アート・マップ」の制作をおこないました。今年大宮を選んだのは、埼玉県でもっともエネルギーで、変化の激しいこのまちの今を知っていただきたいと考えたからです。

〈大宮アート散歩〉の開催は10月23日ですが、10月8日に川口で銭湯をめぐるまち歩きがあり、まずそれに参加しました。SMFが主催したこのまち歩きは〈工場と銭湯—川口へのオマージュ〉というKAWAGUCHI ART FACTORYでの展示会とあわせておこなわれたものです。「キューボラのあるまち」と言われるように、屋根の上にキューボラの突き出した鋳物工場が多く立地していた川口。そこで働く人びとにとって仕事を終えた後の銭湯というのは、なくてはならないものでした。それが時代の変化を受け、鋳物工場が高層マンションにとって変わり、銭湯も激減してきたのです。かろうじて残る“熱かった時代”の痕跡を読み解いていくま



ち歩きでした。

そして10月23日、大宮のまち歩きの本番です。直前に川口を歩いたために、ものづくりのまちという視点が加わりました。川口が多く鋳物工場の集合だったのに対し、大宮は旧「国鉄大宮工場」(現、大宮総合車両センター)という圧倒的な存在が君臨し、鉄道の分岐点という意味でも人とモノの一大集積地でした。さらに氷川神社というコスモロジカルな聖域に裏打ちされて、今でも厚みのある都市であり続けています。午前10時、まち歩きは「さいたま新都心駅」を出発し、氷川参道から大宮の中心街を目指します。旧「大宮宿」の骨格を残した都市空間は、南北に走る中山道と東西の路地という一見整然としたグリッドののっけながら、明治以降の経済活動によって路地一本ごとに個性があつて、身体スケールに近い濃密な質を形成しています。昼食は「埼玉県立歴史と民俗の博物館」でとり、盆栽町へ向かいました



が、そのあたりは住宅地としても落ち着いた空間です。さらに氷川様の裏参道から中山道にもどり、聖と俗とが隣接している様を感じながら西口へ……。そして旧「国鉄大宮工場」や再開発された都市のスケールに圧倒され、ひっそりたたずむ教会の内部でほっとするなどしながら歩き続け、予定を2時間も超過して大宮駅でゴールとなりました。参加者の歩数計から推測すると、15キロにもおよぶ強行軍でした。

「アート・マップ」づくりでは、下見から散歩当日までに得られなかった情報を追加して、地図に落としていきました。地図は浦和・川越のマップよりも紙面を拡大して、大宮という空間のボリュームの感じられるものになりました。「大宮アート・マップ」を持って、大宮というまちを歩き、いろいろな場所で新たな発見をしていただければと考えています。

青山恭之(SMF運営委員)

